

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 日高 薫

まず、日本の研究者が輸出漆器を主題としたことに、本論文の大きな意義がある。桃山時代から江戸時代にかけて、日本製の漆器が遠くヨーロッパや中国に大量に輸出され、彼の地で愛好され、高く評価されていた。日本美術史の専門家としてその事実を重視し、中心的な研究主題として真摯に取り組み、長年の蓄積を1冊の書物にまとめたこと自体が画期的である。なぜならば輸出漆器は、現在の日本の国境線の中で語られがちな日本美術というものを再考するためのよき題材ではあるが、その研究は地理的な条件に恵まれた海外の研究者たちに主として先導され、必ずしも制作地である日本の美術や社会とじゅうぶんに関連づけた考察がされてきたとはいえない。著者は、ヨーロッパや中国の各地に散在する膨大な量の輸出漆器の遺例を実際に調査し、文献史料との照合をし、ヨーロッパ、日本、中国の研究者による先行研究をよく消化した上で、造形の特徴とその受容について日本側からのさまざまな新しい検討を加えている。

もうひとつの意義を挙げるなら、けっして質的に高い作例ばかりに恵まれているとはいえない輸出漆器を扱うにあたり、特別な優品を分析するのとは違った方法論を自覚し、個々の作例がいかに作られ用いられたかを具体的に明らかにしようとする地道な研究を実践していることである。その歴史研究は、自ずから日本国内の範囲にとどまらず、日欧交流史、日中交流史、ヨーロッパにおけるシノワズリー、ジャポニスムといった広大な領域へと広がっていくが、輸出漆器という事例に即してそれらの一節を着実に解明し、確かな貢献をなしている。特に、輸出漆器を注文する者、制作する者、使用する者の立場から多角的に考察し、それらの間の一方通行でなく、さまざまな力の交錯する場として輸出漆器をとらえようとしている点、また日本とヨーロッパの関係に視野を限定するのではなく両者とアジアとの関係を重視している点が、本論文の重要な特質である。

こうして本論文は、輸出漆器の意匠と技法が、制作者と受容者それぞれの事情で生まれ、変容していったありさまを実証的に跡づけ、日本工芸史研究の分野での近年注目すべき業績となり得た。日本・東洋美術史のすぐれた研究に与えられる第20回国華賞を受賞したのも納得させられる。

もちろん、遺品、史料ともに多くを渉猟した労はたたえられるものの、それらを用いての分析や前提となる歴史観などについて、なお考察を深める余地があるのも事実であろう。叙述の方法や外国語文献の表記にもいくらか問題を残す。とはいえ、全体として350年にわたる輸出漆器の歴史を概観できる体系を備え、今後の輸出漆器研究の基礎となるだけの充実した内容を持つ本論文は、博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいと審査委員会は判断した。 _